

左川ちかを探して(2)

―春山行夫宛書簡から―

島田 龍

拝啓

お手紙ありがとうございました。

生れて始めて原稿料をいただきましたので、うれしくて、どうしていいのかわかりません。四人も五人ものひとに御馳走するつて約束してしまひました。ほんとうに色々とありがとうございます。二、三日うちに御礼にまいりたく存じます。

春山さんのお部屋はいつもどつさり花があつていいと思ひます。菜種の花はもうしほれたか知ら。

私はお友達からすけつちぶつくを貰つたので毎日いたづらしてをります。

こんどおみせ致しませう。さようなら

十四日 左川ちか

発信人…左川ちか

発信年月日…一九三二(昭和七)年二月一四日

消印局名…淀橋 二月一五日消印

形態…封書(丸善印行原稿用紙二〇×一〇、二枚)

発信人住所…府下世田谷町二九九四 川崎内

受信人住所…市外中野町城山四十

一九三二年二月、左川ちか二一歳の誕生日に認めた書簡(原文のまま)である。兄川崎昇夫妻宅に居候していた世田谷から中野に暮らす春山行夫(本名…市橋涉、一九〇二〜一九四〇)に投函した。このとき春山は二九歳。

詩で初めて原稿料をもらったことへの初々しい喜びに溢れている。礼状のみでなく直接お礼に伺いたいと申し出る折目正しい性格も窺われる。

稿料を受け取った詩とは、二月一日発行、『若草』八巻二号掲載の「冬の詩」を指す。竹中郁、北園克衛、春山行夫、澤木隆子、杉田千代乃との合作詩だ。現在は『左川ちか全詩集』新版（森蘭社）に収載されている。

女性向け文芸誌『若草』は、宝文館発行。昭和初年の竹久夢二が手掛けた表紙で知られる。創刊号が二万部、その後も発行部数を伸ばし、読者投稿が盛んな人気雑誌であった。叙情詩人時代の伊藤整が全国に女性読者を得るきっかけとなったのは、小野十三郎による同誌掲載の書評であった。なお『若草』をめぐるのは近年、小平麻衣子編の論文集が刊行されている。

「冬の詩」掲載号の編集長は北村秀雄。読者文芸欄の詩の選者は堀口大學が務めている。春山も何度か詩や随筆を寄稿しており、ちかが合作詩に参加するにあたって彼の手引きがあったのだろう。二人の出会い、春山が厚生閣書店時代に編集していた『詩と詩論』の頃である。稿料は出なかったが、ちかはジョイス『室楽』の翻訳を同誌三二年一月に、同年六月には六篇の自らの詩を掲載している。後継誌『文学』『詩法』を含め、彼女の主要投稿誌の一つであった。

ちかが当時翻訳していたハリー・クロスビーらモダニズム作家のテキストには、雑誌『transition』『Pagany』が目立つ。これらの雑誌を『詩と詩論』で熱心に文壇に紹介していた一人が春山である。翻訳指導を受けるため伊藤整のアパートに足繁く通っていたちかだが、「春山さんのお部屋」でも翻訳の相談をしていたのかもしれない。二月頃から花を咲かせる菜の花を気にかけているのも、前回の訪問からそう日数が経っていないことを推測させる。一週間前の二月七日、中野菊屋で開かれた第一回椎の木茶話会に二人は出席している。

スケッチブックで「毎日いたづらして」いるとは、佇立小樽高女時代から絵画をよくし、モディリアーニの画集を大事にしていた彼女らしい姿だ。



三三年一二月に著書『ジョイス中心の文学運動』（第一書房）を刊行する春山は（もつとも同書はジョイスそのものを扱ってはいない）、ちかの『室楽』も別に書評しており、青年ジョイスのデカダンスへの憧憬を論じている。先の書簡は一年以上にわたる『室楽』翻訳を終えた直後のもので、伊藤整監修のもと加筆訂正を施し、椎の木社から単行本を刊行するのは八月のことになる。

年長のモダニズム詩人春山行夫は、左川ちかの詩をどのように評価していただろうか。『椎の木』「雑感」（三三年一二月）で詩「The street fair」に注目する。

The street fair

舗道のうへに雲が倒れてゐる

白く馬が這ひあえぎまはつてゐる如く。

夜が暗闇に向つて叫びわめきながら

「**空百ママ**」を殺害するためにやつて来る

光線をめつきしたマスクをつけ

窓から一列に並んでゐた。

人々は夢のなかで呻き

眠から更に深い眠へと落ちてゆく。

そこでは血の気の失せた幹が

疲れ果て絶望のやうに

高く空を支へてゐる

道もなく星もない空虚な街

私の思考はその金属製の

真黒い家を抜けだし

ピストンのかゞやきと

燃え残つた騒音を奪ひ去り

低い海へ退却して

突きあたりうちのめされる

春山は、《椎の木》に投稿する若い詩人の多くが「単純なものを純粹と想つて」「石鹼の模様のやうなスベスベした純粹性」を謳うという知的活動にとどまり、「通常性」を破らない「健全すぎるうらみ」があるとした。代表格の阿部保の詩などはレンズで例えれば「望遠鏡で省略された秩序」で、「一語一語削つて作品に出来上つた秩序」であるから、そのまま一語つつ削りつつければ最後には何も残らない純粹性だと評している。

一方、左川ちかや山中富美子の詩はこれと対照的だとする。純粹性を破つた先に生ずる統一や均斉の妙を彼女たちの詩に認めている。とくにちかの詩は「顕微鏡的で増大された秩序」であり、「一

語一語ふやして作品のなかに出来上った秩序」であるから、それはやがて作者自身の理解を越え「どこまでもふえてゆく」とみた。春山の高い評価と強い興味は、その秩序が作者個人の手を離れどこへ向かうのか、詩人左川ちかの「大胆」な姿勢の方にあった。

通常性・純粹性を破った先に生じる「均斉」とは、のちに北園克衛が言うところの「均整」と重なる。北園はちかの詩における「均整」について、「単にレトリックの上でのそののなさといふ意味ではない。レトリックの世界と、それからはみだしてゐるものとの均衡によつて整へられた安定といふ意味である」と言う。

ちかの詩の根幹にある「通常性」を破り、「レトリックの世界」からはみ出すものとは何か。筆者の理解では、端正でモダニスティックな律格を崩し突き抜けようとする反作用の力、すなわち「私」という詩的主体の絶唱に他ならない。緊張感を保ったままの激しいせめぎ合いが最後の一行に向けて放たれる。

ちかとは詩風を異にしている春山であったが、その批評眼は一步踏み込んで彼女の詩を把握している。



お便りたまはりましたありがとうございます存じました。

先日モダン日本社から速達がございまして詩を十一月号に間に

合はせていただきました。いつもながらご配慮のことほんとうに

ありがたうございます。詩がお金になりましたのは二度目

でございます。威張りたいみたいなどてもうれしうございます。

みな春山さんのおかげでございます。」

はじめはいつかの若草と、それから行動と、こん度と、あの為替を

もつて郵便局に行くときの気持は私にとりまして忘れられない

ものでございます。いつまでもこんなではいけないと思ふ心だ

けでございますけど、勉強いたしたく存じます。どうぞ今后と

もよろしくお願い申し上げます。

雨が降ると寒くて手なんかかちかんでしまひさうになります。」

庭が大部荒れて、垣根から向ふの畑がすけて見えます。春に草と

一緒にコスモスを摘んでしまひましたら、この秋は少ししかなくて、

それが雨の中で開いたものですから色が薄いやうな気がいたし

まして、花の少いのは悲しいやうに思ふときがございします。

自動車学校の方へ参りますと草に蔽はれた川があつて、杉の林の

道があつて、其処を大きな聲で話して歩くとたいへん気持が
よいございます。お元気になりましたら、私共の方へもお出
かけ下さいますやう。 さようなら。

十月十一日

左川ちか

春山行夫様

発信人…左川ちか

発信年月日…一九三四（昭和九）年一〇月一日

消印局名…渋谷 一〇月二日消印

形態…封書（鳩居堂製書簡箋、四枚）

発信人住所…世田谷区世田谷五ノ二九九四 川崎方

受信人住所…市内中野区高根町二八

一九三四年十月の書簡である。春山への感謝を述べ体調を気遣っている。先の礼状と同じく花を話題にしているのは、のちに『花の文化史』『花ことば』を著す花好きの春山ゆえだろう。世田谷の自宅周辺、秋の風景を少しさびしげに描写しているのも面白い。

モダン日本社の詩とは、『モダン日本』五巻十一号に掲載された詩「季節」（「夏のをはり」を改題改作）である。前年に厚生閣を退社した春山は、この年の八月『詩法』（紀伊国屋書店）の編集同人となり、『三田文学』『若草』などを活動の場として執筆に専念している。『セルパン』の編集者となるのは十二月だ。

原稿料が出たちかの詩は、『若草』の「冬の詩」、《行動》一卷三号（紀伊国屋出版部、一九三三年一月）の「The street fair」「雲のやうに」「雪の門」「他の一つのもの」、そして《モダン日本》の「季節」ということになる。ちなみに翻訳詩やエッセイ、詩の改作再掲も含めると、ちかはこの頃までに延べ一五〇篇ほど作品を掲載している。

《行動》は三年の創刊時から春山が執筆している。《モダン日本》にも三三年頃から何度も詩や随筆を寄稿している。「みな春山さんのおかげ」と認めた二通の書簡は、春山行夫が左川ちかの才能を認め気につけ、積極的に引き立てていたことがわかる重要な資料だ。さらに一九三五年八月、春山の『セルパン』五二号に「海の花嫁」を寄せている。

季節

九月はやく葉らは死んでしまひ

焦げただれた丘を太陽が這つてゐる

そこは自然のテンポが樹木の会話^{たちき}をたすけるだけなのに
都会では忘れられてゐた音響が波の色彩と形を考へる

いつものやうに牧場は星が咲いてゐる

牝牛がその群がりの中をアアチのかたち^{たち}にたべてゆく

凍つた港からやつて来るだらう見えない季節が

しかもすべての人の一日が終らうとしてゐる



詩人江間章子は、この年の初夏ちかと交わした会話についてのちに回想している。妻のいる春山への片想いを江間が告白すると、それをつよく咎め、かつて自分の愛した男が秘かに結婚し、新妻を東京に連れ帰ったときのことを話し、さびしそうに微笑んだ。江間はその男の名を聞けなかった。親友を諫めたちは、兄川崎昇と春山との不和にも心を痛めていた。

一方詩人としての左川ちかは、一時中断していた翻訳を三三年夏から再開。テキストや作家選びに伊藤整の影は既がない。詩作においても独自の詩風を重ねていく成熟期にあつた。

「いつまでもこんなではいけない」と、今後の詩人としての意気込みを春山に語っているが、実質的な詩作期間はもうあと一年もない。末期の胃癌で入院するのはちょうど一年後の十月であつた。「垣根から向ふの畑」とは、病床の彼女が水彩で賀状に描いた「ウラノ南天畑」であろうか。未投函に終わった賀状は、現在小樽文学館に所蔵されている。

三六年一月一〇日、葬儀に駆けつけた春山は、花屋で求めた白い薔薇の花を棺に納め、彼女を見送った。

春山は「ペンシル・ラメント」と題した追悼文を同年三月の《椎の木》に寄せた。銀座を闊歩するちかを思い出し、マリー・ローランサンにもなぞらえ、春が来る前に人生に冷たい「さよなら」をした彼女を惜しんでいる。

それから一八年後の五四年八月、《北海日日新聞》でちかを回想している。葬儀のこと。アメリカで話題になった『室楽』のこと。『左川ちか詩集』（三六年十一月、昭森社）のことなど。その詩については『詩と詩論』のエコールではあるが、それより少しあとの近代派に属する」と位置付け、次のように述べた。

幻想ということ^{こと}を口にする詩人は多いが、幻想の中に生きた詩人はすくない。シエラザートの曲をきいた夜、音楽界の廊下で盛装した彼女に逢つた時のような印象を残して、彼女は我々の世界から姿を消した。

春山の多彩な評論活動を支えたのは膨大な蔵書で、その内容やキーワードはカードで分類整理されていた。四五年二月の空襲で中野の自宅の蔵書は大半が焼失。土岐津など数カ所に疎開させていた蔵書も、戦後多くは手元に戻らず処理されてしまった。晩年まで古書店街で戦前の雑誌・書籍・詩集を集め直し、執筆に必要な研究書・参考書を求める春山の姿を記憶している者は少なくない。疎開させ戦災を免れた詩誌・詩書があった。《青騎士》《馥郁タル火夫ヨ》《衣裳の太陽》、西條八十、高橋新吉、竹中郁などの詩書である。その中に左川ちか『室楽』があり、最後まで大切にしていたという。

最晩年は静子夫人（二〇〇七年一〇月に九六歳で死去）とともに、寄贈する蔵書整理を日課としていた。現在は文化史関係の書物約七〇〇冊を資生堂企業資料館（静岡県掛川市）、飲み物・醸造関係約三〇〇冊をサントリ、それ以外の二万七千冊もの蔵書の特種東海製紙Pam（静岡県駿東郡長泉町）が所蔵している。

春山死後、自宅で静子夫人が書簡の入った箱を発見した。防空壕に箱を避難させ焼失を免れたようだ。編集者という職業柄もあってか、差出人は阿比留信、阿部知二、網野菊、安西冬衛、伊藤整、北園克衛、左川ちか、高木斐瑳雄、竹中郁、中山省三郎、堀辰雄など多岐にわたる。やり取りの時期は大正末年に遡る。舌鋒鋭い批判や論争を厭わなかった春山であったが、論争相手の伊藤、北園たちとは終生交友関係が続いていた。

春山の資料を語るのに外せない人物がいる。詩人で図書館司書でもあった中村洋子さんだ。春山行夫の書誌研究を八〇年代から始め、一〇〇〇点以上の春山関連文献を収集した。その研究成果は春山夫妻の協力を得て『人物書誌大系 春山行夫』（一九九二年）に結実、その後の春山研究の礎となった。

中村さんは静子夫人と書簡資料を整理し、安西や北園の書簡を《文献探索》で報告している。春山に関連する論考や覚書など三〇篇以上を遺し、書簡集をまとめることを期していたようだが、二〇一一年九月に急逝した。

左川ちかの書簡にも同人誌《ノワール》で触れている。書簡から滲み出る人柄を愛おしみ、その詩の「不思議な魅力」に惹かれ、最晩年の詩「海の天使」（二五年八月）を好んだ。

調査研究が途絶した書簡資料については、中村さんの遺志を汲んで、後世の研究に資するよう市橋家、中村家遺族の協力を得て現況を整理し、各企業蔵資料群の概要とともに別の機会にまとめた。

本稿で紹介した左川ちかの書簡二通は市橋家所蔵。中村さんのものと思われる写しが『左川ちか全詩集』とともにオーストラリア国立図書館にある。今回新たに、一九三二年九月二九日消印と思われる春山宛の絵葉書が市橋家で確認された。札幌から投函し、近況と帰京する旨を知らせている。少し前に余市の川崎家が火災で焼失し、母川崎チヨと妹キクは札幌で暮っていた。四年ぶりに帰郷したちかは、北園克衛にも「札幌はあまり静かなので不安で臆病になりそうです」という葉書を八月末に送っている。

春山宛の葉書は、「北海道から彼女はポプラの林を背景とした広い野原の写真を送ってきた」と春山が「ペンシル・ラメント」に記したものである。文面は判読困難な部分も少なくなく状態もよくないため、本稿ではその存在を指摘するにとどめる。いずれ紹介したいと思う。

今回の調査にあたっては、市橋文夫・節子さんご夫妻、中村洋子さんのご遺族、滋賀大学の菊地利奈さんに多大な協力をいただいた。改めて心から感謝申し上げたい。

【付記】『資生堂企業資料館蔵書目録』（一九九六）に同館蔵春山文庫のリストが掲載。同文庫は研究目的に限り閲覧が許可されている。詳しくは同館HP参照。サントリー寄贈分は現在どこにあるのか同社でも把握しておらず、関連部署の書籍に紛れている可能性もある。目録の有無は不明。特種東海製紙蔵春山文庫は現在調査整理のため非公開。正目録は作成途中。調査終了後の公開を予定している。

【参考文献】

- 江間章子『埋もれ詩の焰ら』（講談社、一九八五年）
- 小平麻衣子編『文芸雑誌「若草」 私たちは文芸を愛好している』（翰林書房、二〇一八年）
- 小野夕靉編、曾根博義協力『左川ちか全詩集』新版（森開社、二〇一〇年）「冬の詩」とちかの賀状掲載。
- 北園克衛『左川ちかと室楽』（第二次『権の木』一年一〇号、一九三二年一〇月／『天の手袋』春秋書房、一九三三年／『北園克衛全評論集』沖積舎、一九八八年）
- 北園克衛『左川ちか』（『詩学』六巻八号、一九五二年八月／『黄いろい楕円』宝文館、一九五三年／『北園克衛全評論集』）
- 島田龍『左川ちか研究史論―附左川ちか関連文献目録増補版』（立命館大学人文科学研究所紀要、一一五号、二〇一八年三月）
- 島田龍『詩人の誕生―初期伊藤整文学と川崎昇・左川ちか兄妹』（立命館大学人文科学研究所紀要、一一七号、二〇一九年一月）
- 島田龍『海の詩人―伊藤整と左川ちか 『海の掬児』から『海の天使』へ』（日本思想史研究会会報、三五号、二〇一九年一月）
- 田尻宗樹『春山行夫伝のためのエスキース―忘れられたモダニストの肖像―（富士川義之他編『ノンフィクションの英米文学』金星堂、二〇一八年）
- 中村洋子編『人物書誌大系 春山行夫』（日外アソシエーツ、一九九二年）
- 中村洋子『春山行夫覚書・書簡の整理』（書誌調査一九九六、書誌調査研究会、一九九六年二月）
- 中村洋子『蔵書の現在―春山行夫文庫』（『現代詩手帖』四〇巻二一号、一九九七年一月）

- 中村洋子「春山行夫賞書 左川ちかの手紙」《『ノワール』》一〇一一年二月
中村洋子「春山行夫宛書簡記録 安西冬衛より」《『文献探索』》二〇〇二、二〇〇二年七月
中村洋子「春山行夫書簡記録 北園克衛」《『文献探索』》二〇〇三、二〇〇三年二月
春山行夫「雑感」《『第二次』》《『権の木』》一年一〇号、一九三三年二月
春山行夫「ジヨイスの三著」《『文学』》四冊、一九三三年二月
春山行夫「ペンシル・ラメント」《『第二次』》《『権の木』》五年三〇号、一九三六年三月
春山行夫「季節風 左川ちか」《『北海日日新聞』》一九五四年八月九日
渡辺美好「中村洋子年譜・著作目録 付参考文献目録」《『文献探索』》二〇一三、二〇一三年二月